The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文學博士松山先生終焉記
Author(s)	小沼, 量平
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 119-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88779
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文學博士松山先生終焉記

小沼量平

昭和二年四月二十三日、懷德堂教授正五位勳六等文學博士松山直藏先生卒す、是より先二月二十三日（水曜日）先生例の如く登堂し、午後七時講壇に登り理學宗傳を講ず、暫くして身體に少しく違和を覺へたれば、平常より十分間程早めに講義を終了し、藤塚書記に向て、今晩は風邪の加減か少しく違和を覺ゆるを以て、急ぎ歸宅して加養すべし、或は明晩（木曜日）の出講（周易程傳）六ケ敷やも圖り難ければ、其邊宜しく賴むと告げて歸宅せられたり、二十四日（木曜日）發熱甚しきを以て、岸ノ里の醫院より醫學博士長谷川卯三郎國手を聘して診察を受けしに、腎臟の疾患なるべしとて其の處方をなせり、其後體溫は一昂一低、數日を經るも輕快に赴かず、一日今井懷德堂理事の見舞に來るあり、折能く京都より狩野文學博士も來訪せられたれば、松山先生は內科の大家なる京都の中西醫學博士の診察を受けたき旨の希望を述べられたるに、今井狩野兩先生は直ちに同意せられ、懷德堂より中西博士の來診を請ひたり、依て中西博士は之を快諾して狩野文學博士と同行にて三月四日午後一時來診せられ、腎盂炎ならんと診察し、其の處方に就て長谷川博士と協議投藥したるに、其の翌日（五日土曜日）には體溫平熱に降り、尿に含有せる蛋白量も大に減少せるを以て、一時は遠からず恢復するものと喜びたり、然れども之れは一時の現象にして、深く藥効の病原に的中したるものにあらざれば、其後また體溫も高熱を示すに至れり、此に於て

中西博士より泌尿科の大家松浦醫學博士の診察を求むる方可なるべしとの注意を受けたれば、懷德堂は松浦博士の來診を乞ひたり、依て三月二十七日松浦博士は京都より來診せられたるが、病原は依然不明にして、或は膓窒扶斯ならんかとの疑もあれば、血液の檢査を行ひたるに、窒扶斯菌を認めず、今回は外科の大家の診察を求めよとの注意ありたれば、外科の泰斗猪子醫學博士の來診を請ひたり、四月六日猪子博士京都より來診あり、其の診察には、曾て十數年前膓の疾患にて、福岡醫科大學病院にて手術を受けたる時の局部に殘留せる『アクチノミコーゼ』の潛伏ならんとせり、（福岡大學病院にての手術は膓を一メートル切取りたる大手術なりしと云ふ）依りて猪子博士は、主治醫長谷川博士に福岡大學病院に於ける手術の局部に『レントゲン』診察を行ふべきことを勸められたり、然るに長谷川博士は自分の診察所には『レントゲン』の設備は、上半身を檢する丈けに止まり、下半身を檢するの設備なければ、鳥潟病院に入院せしめては如何、殊に夫人も長時日の看護にて疲憊の狀も見ゆれば、此上自宅療養は看護上困難なるべしと告げられしかば、四月十五日鳥潟病院に入院して、院長醫學博士藤森舜吉國手の診療を受くることゝせり、入院後『レントゲン』診察を行ひたるに、其の結果にても確たる病原は判明せず、矢張往年福岡に於ける手術の局部に黴菌が集りたるものなるべしとせり、四月二十一日朝九時、學子太田氏が御見舞申上げたるに、此の朝早く廣島より令妹も御見舞に來られたる由にて、今恰も令室令息令妹の三方を枕頭に招き遺言せんとする所なりしかば、先生は、太田氏の來訪は幸なり、此處に來りて共に聽き呉れよとの事なれば、太田氏も病室に入りて列席せしに『予は最早何時言語が發せられなくなるやも難計、今の內自分が思ふ事を錯誤なく卿等に告げ得る間に遺言すべし』とて、萬端の敎訓を與へ、次に太田氏に對し『今度の病氣に就て、聽講生諸子の親切は實に徹底せる親切にて、誠に滿足で難有思ふ、予は感涙を禁じ得ない、此事は君

より諸君に宜敷傳聲して頂きたい』と陳べられたり、其の家族に對する教訓、太田氏に對する傳言、實に講壇に登りて經傳を講ずる時の態度と少しも變ることなく、浮生に對する執着なぞは聊かも見へず、高德にして天命を知れる人格者の風神高邁なるに感激せりと云ふ、翌二十二日(金曜日)院長より、先生の容體心臟の衰弱甚しければ、一兩日の外は生命保ち難かるべしと夫人に內示せられたれば、直ちに遠近の親類に危篤の電報を發せられたり、此の報の聽講生間に傳はるや、何れも愕然として色を失し、鳥潟病院に伺候する聽講生續々として踵を接したり、予も二十三日(土曜日)午前九時鳥潟病院に御見舞申上げたるに、御發病以來絕對に面會禁止なりし醫戒も、最早永訣を許すの意乎、解禁せられたるものと見へ、先生は予の伺候を早くも知りて病室に引見し、能く來て呉れた、是までも屢次來訪を辱ふしたる由なるが、醫戒に依りて面會を謝絕し失禮であつた、予も今は萬事休矣、天命を待つの外なしと、予は兩手を伸べて除ろに先生の御手を握り、御大切に被成候へと申上げ、他を言ふこと能はすして拜辭したるが、是が今生の永訣かと思へば、感慨胸に迫りて言はんと欲するも言ふ能はす、落涙の懷抱を霑すを禁じ得ざりき、同夜七時四十分遂に葡萄狀球菌性敗血症と稱する病名の下に、先生發病以來滿二ヶ月にして、夫人令息親族故舊に枕頭を護られつゝ鳥潟病院第三十五號病室に於て溘焉として遠逝せられたり、嗚呼人の世に生る、嫩として飄風の如し、彭修殤短是れ天命なり、先生疾くに天命を樂む、今將た歸するに臨んで奚をか疑はん、遺骸は即夜夫人令息其他の者に衛られて、千本通の自邸に歸還し、直に喪を發せられたり、夜十時懷德堂より『松山教授今夜七時半卒去』と云ふ先生捐館の訃電を各方面に發せられたれば、二十四日(日曜日)には早朝既に千本通の松山邸に懷德堂常任理事今井貫一、懷德堂顧問狩野直喜兩先生を初めとし、聽講生野口幸雄、太田勘兵衛、井上正美、岡田玄碩、中川幸三、飯島溜三郎、長岡義鄕、山本檜信、洒井全太郎、小沼量平等も來會し、夫人令息等に弔詞

を述べ、尊骸を稽顙し、次で今井理事の指揮の下に葬儀及告別式の順序を定め式場設備其他に關する堂友會員の役割分擔等は別に堂友會員の集會協議に任せ、葬儀及告別式の日時を定め訃報を發せり。

此夜堂友會員惣代數名松山邸に至り、御親族の方と偕に通夜を勤修す、二十五日新聞紙に廣告を登載して、喪を一般の知人に知らしめたり。

此日(月曜日先生卒去後の第二日)、午前十一時京都帝國大學文學部教授文學博士新村出先生京都帝國大學より松山先生に交付せらるべき學位記を齎し來て、令嗣松山堯氏に手交せられたり、先生嚮に北宋五子哲學と題する學位請求論文を京都帝國大學に提出せられたるに、同大學文學部に於ては、審査委員の精覈を經て教授會を通過し、文部大臣に稟申中なりしが、漸く此頃に至り認可せられ、四月二十三日を以て學位授與を發表せられたるが、先生は其夜卒去せられ、二十四日は日曜日にて送達の手續を履行し得ず、二十五日新村博士が携來り令嗣に傳達せられたるものにて、先生が存生中に之を一覽し得ざりしは、誠に千秋の遺憾なりとす、其の學位記左の如し、

學位記

兵庫縣
松山直藏

右者論文北宋五子哲學を提出して學位を請求し本學文學部教授會は之を授與すべき者と認めたり仍て大正九年勅令第三百號學位令に依り茲に文學博士の學位を授く

昭和二年四月二十三日

京都帝國大學

第六號

……○……

此の夜堂友會員惣代數名松山邸に至り、御親族の方と偕に通夜勤修せり。

二十六日告別式場設備分擔の堂友會員は、早朝より懐德堂に詰め、裝飾工匠を指揮して、佛式に依る祭壇其他式場の裝飾を施し、正午には播全部整頓して靈柩の到着を竢つのみとなれり、

松山邸に於ては、正午より歴代の菩提寺たる州明石市の本立寺住職を請じ、大阪の本照寺正

福寺の住職も參同して葬儀を勤修し、午後一時二十分靈柩車は松山邸を發して懷德堂に向はれたり。

懷德堂には午後一時頃より役員職員を初めとして、其他の關係者續々來會して、靈柩車の到着を待てり、午後二時靈柩車到着役員職員聽講生一同門の兩側に正列して奉迎し、靈柩は今井理事の先導にて祭壇に奉安せらる、二時二十分導師喪主親族故舊着席し、次で參列者着席す。

今井記念會常任理事は、靈柩前に進みて先生の永訣の式を本堂に於て擧行する旨を申告す、次で理事長代理小倉記念會理事、京都帝國大學文學部有志總代狩野先生、東京嘉納塾同窓會代表日高驥三郎氏、大阪陽明學會代表石崎酉之允氏、懷德堂聽講生總代小沼量平の弔詞朗讀あり。

次で各地の知友其他より寄せられたる弔電二十一通を吉田助教授に依りて讀み上げらる。

次で遺族親戚の燒香あり、引續き一般告別者の燒香敬拜に移り、四時終了、四時十分靈柩懷德堂を發す、第一自動車には導師、第二自動車には靈柩、第三自動車には喪主、第四自動車には遺族、第五自動車には親戚故舊、第六自動車には懷德堂記念會役員、第七自動車には懷德堂々友會總代乘車し、其他有志の自動車と共に五時阿部野齋場に着す、導師の讀經中、靈柩は竈内に移されて奉安し、密閉して鎖鑰を施さる、噫萬事休す矣。

本日の告別式に參列せられたる諸氏は京都帝國大學の小西、新村、高瀨、狩野、内藤、矢野、野上、桑原の諸博士を初め、安井小太郎氏、野田大阪高等學校長、中目大阪外國語學校長等約三百名、頗る嚴肅を極めたり、越て五月二十六日先生の遺骨は、令嗣松山堯氏に捧持せられ、未亡人親戚等に護られて、午前八時五十二分大阪驛發列車にて故郷播州明石の本立寺に歸葬せられたり。

驛頭には今井懷德堂常任理事夫妻、吉田懷德堂助教授、堂友會員十數名近隣の親交ある諸氏諸夫人多數の見送ありたり、